

『源氏流極秘奥儀抄』注釈(五) 31真木柱〜38鈴虫

岩 坪 健

本稿は『源氏流極秘奥儀抄』の真木柱(『源氏物語』第三二帖)から鈴虫(第三八帖)までを掲載する。各帖の担当者(井上大佑、塚本舞衣、香ノ木麻由)は、すべて本学博士課程在学者である。凡例などは前稿と同じであるので省略する。

三十一 真木柱

ひげ黒の北の方¹にも、け付ておはせし故²、玉かつらを北³の方になし給ひて、すてかへ、大将³、此御方よりかへり給はねば、もとの北⁴の方、里⁵にかへらんとおぼしめして、歌をかき、柱⁴の少しわれたる中江⁶おし入て出給⁷ふを、楨柱⁶の巻となつたり。書給⁵ひし紙のいろは、ひはだ色⁷なり。

今⁶はとて宿⁴かれぬともなれきつる楨⁶の柱⁷よ我⁷を忘るな

真木柱

御伝¹曰、長⁷春⁷を幹⁷にして、枯⁷たる大葉⁷あしらひ也。是⁸は恨⁸述⁸懐⁸の意⁸を⁸含⁸て、茨⁸あざみ⁸など針⁸ある物⁸を⁸活⁸る⁸を⁸習⁸

『源氏流極秘奥儀抄』注釈(五) 31真木柱〜38鈴虫

とす。又、⁹花入を柱に懸ること、此卷より起原と心得へし。

愚按^{ウツ}曰^ク、此花形^{ニイハク}、珍客貴人^{チンキヤクキニン}などの初会^{シヨウハイ}には活べからず。又、客より数瓶好^{マツキヤク}あれば、活るもくるしからず。又、¹¹歌を書^{カキ}給へる紙の色^{カミ}、ヒハダイロ也。射干^{シヤク}の花の色^{ハナ}とするへし。依而^{ヨリ}、檜扇^{ヒアフキ}をいくるもよし。此色^{コノイロ}に似^ニたる花^{ハナ}、何^{ナニ}てもよし。又、赤色^{アカイロ}の花もよし。「はいもたち、御^ミそも、やけこがれなんとす」といふ詞によれり。又、¹⁵柏^{カシハ}をも活^{イク}なり。玉かつらと柏木^{カシハキ}と、おとゞひにて、おはしますをしらず、いひわたりしなり。

三十一 真木柱 明石の宮。長春、枯^{カレ}大葉、茨、アザミ、射干、芝蘭、(掛花)。

【訳】髭黒の大将の奥方^{ウケ}に物の怪^{モノ}がとり憑^ヨいていらつしやつたので、玉鬘を後妻になさつて(前妻を)捨て替え、髭黒の大将はこの玉鬘の元から(前妻の所に)お帰りにならないので、元の奥方は実家に帰ろうとお思いになり、(娘である真木柱は)和歌を書き、(常に寄りかかっていた)柱の少し割れている中に(歌を書いた紙を)押し入れて、(家から)お出になられるので、真木柱の巻と名づけた。(歌を)お書きになった紙の色は、檜皮色^{ひわだ}である。

今はもうこれでこの家を離れてしまったとしても、長い間馴れ親しんできた真木の柱よ、私のことを忘れないでおくれ。

師伝によると、長春花を中心にして、枯れている大葉を添えるのである。これは恨みや不満を述べるという意味を含み、茨や薊^{あざみ}など棘^{とげ}があるものを活けることを決まりとする。また、花器を柱に掛けることは、この巻から始まると心得るがよい。

愚案によると、この形式は、珍しい客や身分の高い人などの(いらつしやる)初めての会合では、活けてはいけな^い。また、客から数瓶の望みがあれば、活けても差しさわりない。また、(真木柱が)歌をお書きになった紙の色

は、檜皮色である。射干または芝蘭の花の色だと知っておきなさい。よって、(射干の別名である)檜扇を活けてもよい。この色に似ている花は、何でも(活けて)よい。また、赤色の花もよい。「髭黒の大将の前妻が、香炉の灰を大将に浴びせかけたので」灰が立ちこめ、(髭黒の大将の)お召し物も焼け焦がれただろう」という言葉によっている。また、柏も活けるのである。玉鬘と柏木とが(異腹の)姉弟でいらっしやるのを(柏木は)知らず、(玉鬘に)絶えず言い寄っていたのである。

【注】 1 「ひげくろの北の方にも、け付ておはせしゆへ」(『龍野』)。髭黒の大将の北の方は、物の怪がとり憑いているため時折、正気を失うことがあった。 2 「玉かつらを北のかたになし給ひて、すて候へ」(『龍野』)。「ひげくろの大将の北のかたになり給ふ」(『小鏡』)。 3 「大将、此御方よりかへりたまはねは、もとの北のかた、里へかへらんと覚しめして」(『龍野』)。 4 「歌をかき、柱のすこしひらきわたる中へおし入て、いで給ふを、まき柱の巻と申にて候」(『龍野』)。「出給ふとて、此歌をかきて、はしらのすこしわたるなかへ、かうかひのさきにて、をし入たまふなり」(『小鏡』)。北の方の娘である真木柱は、いつも寄りかかっていた柱との別れを惜しみ、柱の割れ目に和歌を書いた紙を入れた。「真木柱」は杉や檜(ひのき)で作った柱で、ゆかりを表す歌語。ここでは娘の真木柱と、父親の髭黒の大将とのゆかりを表す。鎌倉初期に順徳天皇が著した歌学書『八雲御抄』には、「もののゆかりなども、真木柱と言ふなり」とある。 5 「かき給ひし紙の色、ひはた色なり」(『小鏡』)。檜皮色は、蘇芳(紫がかった赤色)の黒みがかった色、または檜のような赤茶色。柱の色に似た紙の色を使用したのは、紙を入れたことが分らないようにするためか。あるいは当時、手紙に付ける草花の色は、紙の色に合わせる習わしがあり、それに準じたか。 6 巻名歌。『龍野』『小鏡』とも異同なし。この歌を詠んだことから、北の方の娘は真木柱と呼ばれる。菅原道真が左遷さ

れたとき、自邸の梅を詠んだ和歌、「東風吹かば匂ひ起こせよ梅の花あるじ主なしとて春を忘るな」(拾遺和歌集・雑春・一〇〇六)の発想による。7「此形、長春を身木にする。枯大葉、応答也」(『龍野』)。「長春」は庚申薔薇こうしんばらの漢名で、月季花とも言う。三角状の棘とげがあり、『大和本草』の月季花の項目に、「イハラノ類ナリ」と書かれている。『いけばな総合大事典』によると、薔薇は棘があるため祝いの席には用いないが、庚申薔薇は祝言でも活けたとある。「長春」には常春とこはる(常に春である)という意味があり、ここでは玉鬘と髭黒との結婚を示すか。「あしらい」とは主となる物に添えて、その働きを助ける物のうち、道具や役枝以外の枝を指す。この場合は長春を支える大葉が「あしらい」になる。枯れている葉は活け花には一般的に好んで使われないが、ここでは髭黒の大将に捨てられた前妻を象徴するか。8「是は、うらみ述懐故、いはら物、あざみの類を生る也」(『龍野』)。茨は、とげのある低木類の総称。薊あやぎは山や野に自生する多年草で、枝の先に淡紅紫色の頭花が咲き、葉にとげがある。ここでは注7の「長春」を含め、髭黒の大将に捨てられた前妻の恨みを暗示する。9「諸花入レを、柱にうち懸る事は、此卷より起るなり」(『龍野』)。柱や長押に花器を掛け、花を活けることをいう。江戸時代初期に出版された『仙伝抄』に「なげしの花の事」の説明があり、古くから知られる。柱の割れ目に歌を書いた紙を入れたことから、この活け方を採用したのである。10身分の高い人などの初会に活けないのは、前妻の恨み(注8)を表現するような活け方であるからか。11注5を参照。12射干シヤガは檜扇ひおうぎの漢名。葉が扇形に開いてつくことから檜扇と呼ばれ、黄赤色の斑点のある花が咲く。その花の色を用いる理由は、注13 14参照。「芝蘭」は芝草(靈芝。万年草)と蘭草(藤袴)で、ともに香草。鬚黒の大将は玉鬘のもとへ行くため、装束に香を焚きしめた。その香りを表現したか。ちなみに、「芝蘭の先づ敗るることを嘲る」(和漢朗詠集・上・秋菊・二六八)における「芝蘭」は善人や君子の比喩。13鬚黒の大将の北の方は

物の怪によつて正氣を失い、玉鬘のもとへ出かけようとする鬚黒の大将に香炉の灰を浴びせかけ、大将の装束が焼けたことにより、香炉の中にある炭火を連想する赤色の花を活けるのであろう。14「はいもたち、御そもやけこかれなんとせしなり」（『小鏡』）。注13参照。15柏はブナ科の落葉高木。柏木が玉鬘を、異母姉だと知らずに求婚していたことによる。

(香ノ木麻由)

三十二 梅枝

正月晦日のころ、源氏のおと、六条の院にてたき物あはせ有し時、朝かほの齋院より、ちり過たる梅がえにふみつけて、こんるりのつぼにたき物入て、五葉のえだに付、白きつぼにもたきものいれて、梅を折てむすび付たるいとこのさま、なよびかにえならず、おもしろくしなされたる、その歌。

花の香はちりにしえたにとまらねと移らん袖に浅くしまめや

梅枝

御伝曰、此形、幹白梅にかざる也。あしらひは又、大葉か鳶尾なるへし。外のあしらひなし。正月晦日ころ源氏のおとと、六条院にて薫合ありし巻也と心得へし。

愚按曰、「梅がえに文つけて、こんるりのつぼ、薫いれて」とあり。然れば紺るりの花、烏頭、桔梗などもよし。又、五葉の松に白花もよし。「白きつぼに薫入て」云々。又、花のものを、きぬいとにてむすびさげたるも、習あり。又、藤、杜若もよし。紫の上にとどふ。又、艸草種々もいくる也。

めつらしとふるさと人もまちそみん花のにしきを着てかへる君

三十二 梅枝 左大臣。白梅、カフトサウ、桔梗、藤、杜若。

【訊】一月下旬のころ、大臣である光源氏が(自邸の)六条院で薰物なまもの合わせを行なったとき、朝顔の齋院から(光源氏へ)花がすっかり散ってしまった梅の枝に手紙を付けて、紺瑠璃の壺に薰物を入れて、五葉松の枝に(紺瑠璃の壺を)付け、白い壺にも薰物を入れて、梅(の枝)を折り(白い壺に)結び付けた糸の様子はしなやかで素晴らしく、趣があるようになされた(ときに添えられた)その和歌。

花の香りは、散ってしまった枝(私のように老いた身)には残りませんが、香を焚きしめた(明石の姫君の)袖に香りが淡く染みこむでしょうか、いや深く染みこみます。

師伝によると、この形式の中心は白梅に限るのである。共に合わせるものは、大葉か鳶尾がよからう。そのほかの合わせはない。一月下旬頃、光源氏の大臣が六条院で薰物合わせを行なった巻であると心得るがよい。

愚案によると、「梅の枝に手紙を付けて、紺瑠璃の壺に薰物を入れて」とある。したがって、紺瑠璃色の花であるとりなほと鳥兜や桔梗などもよい。また、五葉の松に白色の花もよい。「白い壺に薰物を入れて」云々(とある)。また、花の元を絹糸で結び糸を垂らすのも、習わしがある。また、藤や杜若もよい。紫の上になぞらえる。また、多くの種類の花も活けるのである。

珍しいと昔なじみの人(あなたの妻)も待ち受けて見るだろう、花の錦を着て帰る君(螢兵部卿宮)を。

【注】1「正月晦こいも日のころ、源氏のおと、の六てうの院いんにて、たき物あはせありし」(『小鏡』)。「正月の頃、源氏、たきものをあわせ給ひし時」(『龍野』)。「六条の院」は、六条の御息所の住居があつた六条京極辺りに、光源氏が造営した邸宅。敷地は四分割されており、春の御殿に紫の上、夏の御殿に花散里、秋の御殿に秋好中宮、冬の御殿に明石

の君を住ませた。薫物合わせとは、めいめいが秘密に調合した薫物を持ち寄り、判者が優劣を判定する遊戯。薫物とは香木を粉末にしたものを、蜂蜜などで練り合わせて作ったもので、その制作は秘伝とされた。2 「ちりすきたる梅かえに、ふみつけて」(『小鏡』)。「散り過ぎたる梅」の表現は、「春過ぎて散りはてにける梅の花ただ香ばかりぞ枝に残れる」(拾遺和歌集・雑春・一〇六三・如覚法師)のように和歌に例がある。3 「こんるりのつほにたき物入て、五葉のえたに付、白きつほにもたきものいれて、梅をおりて、むすひ付たるいとのまま、なよひかにえならず、おもしろくしなされたるに、その歌」(『小鏡』)。4 卷名歌。『小鏡』も『龍野』も同文。光源氏は娘(明石の姫君)の裳着(成人式)の準備のため、薫物の調合を朝顔の斎院に依頼した。その薫物と共に、朝顔の斎院から光源氏へ送られた和歌。朝顔の斎院は散って盛りを過ぎた梅に、老いた自身の身を重ね、明石の姫君と比較して「散りにし枝」とへりくだっている。また初句の「花の香」には、光源氏へ贈った香の意を掛ける。5 「此かた、身木、白梅に限り申候」(『龍野』)。梅に限るのは、朝顔の斎院が梅の枝に手紙を付けて送った(注2)から。また紅梅ではなく白梅に限定したのは、白い壺(注3)による。6 「応答は、大葉ものか、しやかが外のあしらい、なし」(『龍野』)。貝原益軒が宝永五年(一七〇八)に著し、翌年に刊行された『大和本草』の「紫羅傘」項には、「又、鳶尾と云。(中略)茎短く、葉広く、花紫に燕子花に似たり」とある。ただし、花全体は淡い青紫色に見えるが、外花被片は白地にオレンジ色の斑点があり、一九世紀に葛飾北斎が描いた「翡翠 鳶尾艸 瞿麦」に描かれている。7 カプトソウは別名トリカプトで、ヤマトリカプト・ホソバトリカプトなどの総称。烏頭はヤマトリカプトの根茎で、その名称は形が烏の頭に似ることによる。有毒で附子とも呼び、狂言「附子」で有名。頂部に兜の形に似た濃青紫色の花を咲かせ。桔梗は秋の七草の一つで、青紫色の花が咲く。紺色の花を活けるのは、朝顔の斎院から贈られた紺瑠璃色の壺に

よる。 8 マツ科の常緑高木。葉は長さ二〜六センチの針葉で、五本ずつ束になって小枝に密生する。五葉の松を用いるのは、朝顔の齋院から贈られた紺瑠璃の壺が五葉松に付けられていたことによる。 9 朝顔の齋院から贈られた白い壺による。ただし物語では、白い壺に梅の枝が付けられた(注3参照)。 10 梅の枝を白い壺に結びつけたことによる(注3参照)。 11 藤も杜若も紫色の花が咲くので、紫の上に例える。ここで紫の上を持ち出すのは、薫物合わせで判者を務めた蛭兵部卿宮が様々な薫物の中から、紫の上の調合した梅花という薫物を絶賛したからか。 12 多くの種類の花を活けるのは、光源氏が朝顔の齋院のほか、六条院に住む紫の上・明石の君・花散里など様々な女性に薫物の制作を依頼したことを表すか。 13 当歌は『小鏡』にも掲載。薫物合わせの判者を務めた蛭兵部卿宮に、光源氏が御礼として装束と薫物を贈り詠んだ歌。「花の錦」は美しい衣装を花に見立てた表現。

(塚本舞衣)

三十三 藤ノ裏葉

雲井の雁の姫君を、夕霧の大将、みどりの袖のむかしより、おもひそめて年をふるに、姫君のち、おと、ゆるし給はざりしが、さてしもあるべきならねは、ゆるし給はんの御心にて、おと、の御庭に藤の花のさかりに、中將をよび聞え給ふ。盃のついでに、「ふぢのうらばの」と、打すさび給へる也。

春日さす藤の裏葉のうちとけて君しおもは、我も頼まん

藤裏葉

御伝曰、此形、藤計を活る也。陰陽の葉、立葉、習ひあり。外のあしらひはなし。此故に床に生るに、必あしらひをそれ〜にいたす也。藤計活る事、許なくては活ること無用。ころは四月と心得へし。

愚按ニ曰、「雲井の雁の姫君を夕霧の大将、みとりの袖のむかしよりおもひ初て」とあり。「父おとゞゆるし給はす」とあり。竹に杜若も此さま也。飛雁、是にキリ入るへし。又、桐を生る、夕霧の訓による也。又、朱雀院行幸おもしろきさま、馬蘭にて冠のさをひとしくし給ふと云所をいくる也。葉二枚（図A）是にかたとる也。是は習あること也。又、三重、上に藤、中に葉もの、下に小草花（図A）を、行幸と見立る也。上の藤は巻の名也。中は月卿雲客、下は早とする也。

三十三 藤裏葉（恋）。梅壺之君。藤、竹、杜若、桐、巴蘭、草花。



(図A)

【訊】雲居の雁の姫君を、夕霧の大将は、緑色の袖（を身に着けていた六位）の頃から、想い初めて年を経て、姫君の父大臣は、（二人の仲を）お許しにならなかつたが、そのままでは済まされないので、（二人の仲を）許してやろうと決心されて、大臣の（お屋敷の）お庭の藤が花盛りの頃に、頭中将（である柏木）を使いによって（夕霧を）お招きになられる。盃を勧めた機会に、「藤の裏葉の」と（大臣が）口ずさまれたのである。

春の日が差しして藤の若葉がほどけるように、あなたの心の内もうちとけて、あなたが（私の娘のことを）想ってくれるのならば、私も（あなたを）頼りにしよう。

師伝によると、この形式は、藤だけを活けるのである。陰葉と陽葉、立葉には秘伝がある。その他の添え物はない。このため床の間に活けるときに、必ず添え物をそれぞれに施すのである。藤だけを活けることは、免状がなければ活けてはならない。時節は四月だと心得なさい。

愚案によると、「雲居の雁の姫君を夕霧の大将は、緑色の袖であった（六位の）頃から想い初めて」とある。「（姫

君の) 父大臣は(二人の仲を) お許しにならない」とある。竹に杜若(を活けるの) も、この有様(を表したものの) である。必ず竹の飛雁という葉は、杜若に切り込みを入れて押し込むのがよい。また、桐を活けるのは、夕霧の霧の訓読みによるのである。また、朱雀院の行幸の趣のある様子は、馬蘭を用いて、(光源氏の) 位の座を(冷泉帝が自身と朱雀院の座と) 等しくなされるというところを(表現して) 活けるのである。二枚の葉は、御座所をかたどるのである。これには伝授がある。また、三重切の竹花入れで、上(の空洞) に藤、中に葉のついたもの、下に小さな草花を活けるのを、行幸に見立てるので。上の藤(が表すもの) は巻の名である。中(の葉) は月卿雲客を、下(の草花) は下々の者たちになぞらえるのである。

【注】 1 「雲井のかりの姫きみを、夕きりの大将みとりの袖のむかしより、おもひ初て、年をふるに、姫君のち、おと、ゆるし給はさりしか」(『小鏡』)。「夕霧の君、雲井のかりの姫宮をおもひそめたまひしを、御父、はしめはゆるしたまはず」(『龍野』)。「みどりの袖」は、六位の者が身に着ける衣。夕霧は幼なじみである雲居の雁と、相思相愛の仲になる(21少女の巻)。しかし、当時の夕霧の身分は六位であり、雲居の雁の父である内大臣はそのことを理由の一つとして、二人の仲を認めなかった。夕霧は内大臣に認められなのまま、雲居の雁を長く想い続けることになる。 2 「さてしもあるへきならねは、ゆるし給はんの御心にて」(『小鏡』)。「後にゆるし候はんとて」(『龍野』)。
32梅枝の巻で、内大臣は入内の叶わない雲居の雁の処遇について悩む。夕霧からの求婚はなく、夕霧には別の縁談の噂が立つ。そこで内大臣は考え直して、二人の結婚を認める気になるが、こちらから折れることで世の物笑いになることを嫌い、思い悩む。 3 「おと、の御庭に、藤の花のさかりに、中将をよひ聞え給ふ」(『小鏡』)。「東(東)の中将をむかひ」(『龍野』)。四月初旬、自宅の庭の藤が花盛りになったことにかこつけて、内大臣は息子の柏木を使いにして

夕霧を屋敷に招く。 4 「さかつきのつゐてにおと、『藤のうらはの』と、うちすさひ給へるなり」(『小鏡』)。「御かはらけの折から、『藤のうら葉の打とけて』とありしを」(『龍野』)。夕霧を屋敷に招いた内大臣は酔ったふりをしながら、夕霧との関係の修復をもくろみ、「藤の裏葉の」と口ずさむことで、雲居の雁との結婚を許す意思を伝える。和歌については注5参照。 5 巻名歌。『小鏡』は本文に異同なし。『龍野』は第三句が「うらとけて」で、『後撰和歌集』(春下・一〇〇・よみ人しらず)と同文。内大臣が口ずさんだのは第二句の「藤の裏葉の」で、「裏葉」(末葉)は草木の茎や枝の先にある若葉を指す。 6 「此かた、藤ばかりを生るなり」(『龍野』)。藤は蝶型淡紫色の花が長く垂れ下がり、房状に咲く。花の時節は晩春から初夏にわたり、和歌では松と合わせて詠まれることが多く、「夏にこそささかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」(拾遺和歌集・夏・八三・重之)のように、常緑である松との組み合わせから「千歳の花」という意味合いを持つ。この藤は巻名に関わり、また藤原氏を象徴し、「藤計を活る」のは藤原氏である内大臣の庭に咲き誇る藤、そして藤原氏の栄華を表す。 7 「陰陽の葉、立葉、習也」(『龍野』)。「いけばな総合大事典」(主婦の友社、一九八〇年)の「陰葉」の項に、「陽葉は表面をみせた葉、陰葉は裏をみせた葉で、表面をみせる葉をもちいたとき、裏面をみせた葉を配置して、陰陽をととのえるのが立華の伝である。生花の伝も多くはこれによる。しかし異説もあって、葉の表面が『あおむく』のを陰、『うつむく』のを陽とする伝もみえる」とある。『龍野』の図には「立葉、陽」「裏葉、陰」と書きこまれている。「立葉」は葉をまっすぐに立てたもの、「裏葉」は巻名に因む。 8 「外の応答ものなし」(『龍野』)。「あしらひ」は31真木柱の巻、注7参照。 9 「是ゆへ、つね／＼床に生るに、応答をそれ／＼にいたすなり」(『龍野』)。「床」は、床の間の略称。藤は支えがないと活けられないので、「あしらひ」が必要になる。 10 「藤計は、ゆるしなくは無用」(『龍野』)。「いけばな総合大事典」

の「許し」の項には「免状」参照とあり、「免状」の項には、「(華道の)家元を頂点として形成される傘下の師匠およびその享受者は、免許により細分化された段階のそれぞれに位置づけられ、家元の流儀名の免許をあたえられ、家元制度の組織に組みこまれた」とある。ここでは内大臣の許しが必要ならば結婚ができないことも響かすか。 11「頃は四月也」(『小鏡』)。 12注1参照。 13注2参照。 14ここでの「竹」は雲居の雁を表す(注16参照)。また和歌では、竹は常緑で節の多いことから不老長寿の象徴として詠まれる。この「竹」は六位であった夕霧の「みどりの袖」と、雲居の雁への変わらぬ想いも表現するか。 15杜若には「冠葉」と呼ばれる葉があり、『いけばな総合大事典』「冠葉」の項には、「かきつばたの花苞についている葉のことをいい、花よりも高く伸びる特徴をもつ」、「かきつばたの生花(しょうか、せいしか)では冠葉を象徴する長い葉を上段後方にもちいるばあいが多い」とあり、流派によつては「烏帽子葉」とも呼ぶ。ここでの「杜若」は、冠を付けた夕霧になぞらえるか。 16「竹を活るに飛雁といふ葉を、はさみ入るべし。是は雲井の雁といふ故事也」(21少女の巻、注17の本文)。「飛雁」とは未生流では、竹の葉の成長の状態で葉先が二葉開いたものを「魚尾」、その中葉が伸びて未だ開いていないものを「飛雁」、その中葉が開いて三葉となったものを「金魚尾」という。「キリ入る」が「切り入る」ならば、切つて中に入れる、切つて中に押し込む、という意味。 17「桐」は「藤」(注6)。「杜若」(注15)と同じく、初夏に紫の花を咲かせる。 18「又、行幸のおり、おもしろかりしは、そのころのゐんと申は、御あにの朱雀院にておはします。主上は、人こそしらね、六てうのゐんの御子、れいせいゐんにておはします。御さを両はんにてあるへきを、六てうのゐん、なを卑下して、太政大臣の御さにせられたり。朱雀院御覧して、いか、とて、あるしの御さをなをさせ給ひ、院の御さにひとしくさせられたるやうのことを」(『小鏡』)。朱雀院と冷泉帝が六条院(光源氏の邸宅)を訪れた折、下座に置かれていた光

源氏の座を、朱雀院・冷泉帝と同列に直したことを「馬蘭」で表現する。「馬蘭」は「葉蘭」の別名で、長柄をもつ大形の葉は長楕円状で披針形。『大和本草』の「馬蘭」項には、「其葉蘭に似て大なる故、馬蘭と名づく」とある。『いけばな総合大事典』の「葉蘭」項には、「伝統的な花材として生花においてもよくつかわれた。生花の技術の修練は、ハランにはじまってハランに終わるといわれたほどのものであった。ハラン扱いについては流派によってそれぞれの定めがきめられている。裏向きの葉を陰葉といい、表向きの葉を陽葉とし、その生付きから葉の中心から右と左へ出る葉の広さの異なり方をみさだめる。陰葉、陽葉、右葉、左葉のそれぞれの使い方をきめている」とあり、「伝書ではハラン（葉蘭）ではなくバラン（馬蘭）とするしている」とある。「陰葉」「陽葉」については注7参照。「冠のさ」は「冠の座」とも「冠の差」とも読める。「冠位」（聖徳太子が定めた、冠の色で位を表わした制度）にちなんで、「冠」は位を意味すると解釈した。19「三重」は花の活け口が三か所切り開かれている、竹製の花器。『いけばな総合大事典』の「竹花入れ」項には、「江戸時代にはいと町人階級の台頭によって茶道人口が増大し、花の世界にも抛入・生花による諸流の勃興をみ、それにとともに流派によってそれぞれ好み型の型がさだめられ、先人の創作による竹花入れをあらわれてくるのである。それとともに流派によってそれぞれ好みの型がさだめられ、先人の創作による竹花入れを手本とする『古人の法』による、竹花入れ切り形の規矩が『極秘伝』として門弟に伝授されるようになってくるのである」とある。20「葉もの」は「葉物」を指すか。『いけばな総合大事典』の「葉物」項には、「葉の扱いに特殊な技術を必要とするもの、または葉に格別な美しさや特色のあるものを総称するが、主として前者についていわれ、立華や生花のような格花にもちいられる」とあり、「生花には手法や状態によって組み葉物、長葉ものなどの名称をもちいる流儀もある。組み葉物は、おもと、葉らん、かきつばた、花しょうぶ、水仙などであり、長葉物は、いちば

つ、しゃが、かきつばた、花しようぶ、かんぞう、蘭、水仙などである」とある。ここでの「葉もの」は、「杜若」や「馬蘭」を指すか。 21「巴蘭」は、「巴」の音読みが「ハ」であることから、「馬蘭」のことか。「馬蘭」については、注18を参照。

(井上大佑)

三十四 若菜 上

源氏、四十一歳の春、子の日の御いはるに、ひげぐるの大將北の方、玉かつらの御子たち伴ひ給ひし折から、光る君の「小松壺つとしをつくべき」との御歌遊ばし、より、若菜の巻とはいふ也。めてたかりしこと、さまざまなればとて、玉かつらの御歌、

若菜さす野への小松を曳つれてもとのいはねを析るけふ哉

六条院御歌、

小松原末のよはひにひかれてや野への若菜もとしをつむへき

若菜上

御伝ニ曰、此形、幹若松に熊笹か、齒朶の木か、ゆづり葉など前にあしらふ。菜の葉を少し留にあしらふへし。此花、真なり。祝儀もの也。正月子日とて、七日のこと也。人日とて、此日は七種の粥、小松引などある儀式也。愚按ニ曰、源氏の御賀也。四十二の御年、正月廿三日を子日とす。初子の日といふは初春也。口伝あり。舟、松、住よしの景を活るも縁あり。又、「新殿をしつらひて」といふ。新宅、わたましの花もよし。

三十四 若菜上(祝儀)。桃園の宮。若松、熊笹、齒朶、ゆづり葉、菜ノ葉。

【訳】光源氏が四十一歳の新春、子の日のお祝いに、(光源氏を祝賀するために) 髭黒の大将の奥方である玉鬘が、(ご自分の) 御子息たちをお連れになった時に、光源氏が「小松は一つ年をとったと」告げるだろう」という御歌をお詠みになったので、若菜の巻と言うのである。喜ばしいことがいろいろあったので、玉鬘の(お詠みになった) 御歌、

若葉が伸びる野辺の小松を引くように、幼い子どもたちを引き連れて、(私を育ててくださった) 元の岩根(である光源氏) を祝賀する今日でありますなあ。

(これに対し) 光源氏の(お詠みになった) 御歌、

小松原のような孫たちの末の長い年齢に引かれて、野辺の若菜を摘むように、私も年を積み長生きできるであらう。

師伝によると、この形式は中心を若松にして、熊笹かシダの木かゆづり葉などを前に添える。新菜の葉を少し、(ほかの草木が倒れないよう) 支えに添えるのがよい。この花は、真である。(この活け花は) お祝いごとである。一月の子の日とは、一月七日のことである。人日ひとひといって、この日は七草粥(を食べ)、小松を引くなどの行事がある。

愚案によると、光源氏の祝賀である。(光源氏が) 四十二歳のお年に、一月二十三日を子の日とする。初子の日というの、新年である。(これには) 口伝がある。舟(の花器) に松を、住吉の景色のように活けるのも縁がある。また、「新築の御殿をしつらえて」と(物語に) 言う。新しい家には、移徙うつましの花もよい。

【注】 1 「正月廿三日に、ねの日、源氏のゐんの御かたへ、ねのひのいはひに参り給ふ」(『小鏡』)。「源氏、四十一才の春、子の日の御いはるに」(『龍野』)。物語と『小鏡』では、光源氏は四十歳。子の日とは、十二支の子に当たる日

のことで、特に年が明けて最初の子の日を初子はつねという。その日には小松を引き若菜を摘んで遊宴し、長寿を願う風習があった。玉鬘は初子の行事に事寄せて、一月二十三日の子の日に光源氏の四十の祝賀を催した。当時は四十歳から老年期とされ、その歳から十年ごとに長寿を祝う会を開いた。 2 「内侍玉かつらの事のかみ、御子にし給ふゆへなれば、ねの日によそへておはしたる」(『小鏡』)。「ひげくろの大將の北のかた、玉かつらの、御子たち伴ひたまひし折から」(『龍野』)。髭黒の大將の正妻である玉鬘が、夫との間に生まれた二人の子息を祝賀に連れてきた。 3 「光る君へのこまつニテ」「としをつむべき」との御歌、あそはせしより、わかなの巻といふ事と承りまいらせ候」(『龍野』)。「小松壺つとしをつくべき」では、光源氏の詠んだ和歌(注8)の本文と一致しないので、『龍野』の本文が正しいか。 4 「御ゆうふかく、さまくにてめてたかりし」(『小鏡』)。祝賀に参加した人々がそれぞれに楽器や朗詠を楽しむ様子。 5 「玉かつらの歌」(『小鏡』)。 6 「小鏡」所収の和歌と同文。玉鬘が光源氏に詠みかけた歌で、「小松」は自身の子ども、「もとのいはね」は光源氏に喩える。「曳」は、「小松」の縁語。 7 「六条の院の御うた」(『小鏡』)。 8 卷名歌。『小鏡』『龍野』も同文。玉鬘の歌(注6)に対する返歌。「小松原」は小松の多く生えた原。初子の日に小松を引く行事があるので、「引かれ」は「小松」の縁語。「小松原」は玉鬘の子どもたち、「若菜」は光源氏自身になぞらえる。「つむ」は、若菜を「摘む」と年を「積む」の掛詞。 9 「此かた、身木、若まつにして」(『龍野』)。「若松」は樹齡の若い松。『いけばな総合大事典』によると、松は「日本の伝統的な花材のなかでも、衆木にすぐれて第一等のもの」、若松は「祝言第一の花材」とされ、ここでは光源氏の祝賀を表すために用いられた。 10 「熊笹か、やき刃に笹か、しだか、ゆづり葉杯(等)、前に応答」(『龍野』)。笹はタケ類の中でも姿の小さいものを言い、中でも熊笹は庭園に最もよく植えられる笹の一種である。葉は緑色であるが、秋から冬にかけて葉の縁が白く枯れ、隈取りくまどりとな

るため熊笹と呼ばれる。「齒菜の木」は羊齒類、特にウラボシ科シダを指すことが多く、葉の裏の白さは白髪（長寿）の象徴とされた。「ゆづり葉」は常緑樹で、『大和本草』に「春、新葉、生ト、ノヒテ後、旧葉ヲツ故ニ、ユツリハト名ツク」とあるように、春に新しい葉が生えた後に古い葉が落ちることから、父から子に譲る喩えとして「ゆづり葉」という名前がついたとする。熊笹・シダ・ゆづり葉はいずれも正月飾りによく用いられたので、物語の一月の場面に合わせて用いられ、光源氏の長寿を祝う意味も含む。また、ゆづり葉には親子草という別名もあり、ここでは光源氏と玉鬘の親子関係を表すか。

11 「（葉）なの葉を少し留にすべし」（『龍野』。「菜の葉」は春に採れたばかりの新菜の葉。初子の日に若菜を摘み、（葉）羹にして食べたことによる。「留め」は生花を活ける時、花の根元が崩れて乱れないように用いる技法。当場面のように祝儀や祝言など客を招待する晴れの場で、花が倒れないように工夫を凝らした。「留め」の技法は使う草木のみで施す場合と、補助的な道具を使う場合があるが、これは花器の種類や流派によって方法が異なる。

12 「此花、真なり」（『龍野』。「真」とは『いけばな総合大事典』によると、「たて花、立華、生花の役枝名」で、「心」「身」「真」の字を当てるが、いずれも曲がったことを嫌う意味があるため、まっすぐなものが用いられる。または曲がったものでも、重心が中心に戻るよう工夫されている。「真」という役枝の種類に「直真」がある。『いけばな総合大事典』によれば、「水際から梢まで、幹にゆがみのないまっすぐな真」を指し、「祈禱や神前あるいは、祝言などの花の真にもちいられる」とあり、「直真にもちいられる花材の最高のものは若松で、この若松をもちいた直真を真の真」であるとす。若松は注9に出ているので、光源氏の四十歳の賀に合わせた手法であろう。

13 「祝義もの也」（『龍野』）。光源氏の祝賀を指す（注1参照）。

14 初子の催しは、近世では一月七日に行われるという意。

15 「人日」とは旧暦一月七日のことで、五節句の一つ。春の七草を混ぜた粥を食べる風習があり、

それを食べると万病を除くといわれる。 16 注1参照。 17 「正月廿三日を子の日とす」については注1を参照。ただし、ここでは光源氏は四十二歳とされ、注1の四十一歳と食い違う。 18 「舟」は舟型の花器の総称。『いけばな総合大辞典』によると、花器以外にも器が舟型のもは少なくないが、「ふね」とだけ示されるものは花器に限らるゝとする。「舟」に松を活けるのは、大阪市住吉区住吉にある住吉大社を表現している。松は住吉社の神木であり住吉の景物とされ、住吉社は古くから海路の守り神として信仰を集めた。明石の君の父である明石の入道は年に二度、船を仕立てて参詣していた。この巻では、明石の君の娘である明石の女御が、東宮の御子である男児を出産した。それを聞いた明石の入道は、自分の願いは果たされたと、京へ最後の手紙を出して山にこもる。そして手紙と共に、住吉の神に立てた願文も送られてきた。「すみよしにて、たてをきたる願書とも、文はこ(通)に入れて、ふう(符)して、のほせてまつる」(『小鏡』)。 19 「新殿しつらひて」(『小鏡』)。新居を準備するのは、光源氏が女三の宮と結婚するためである。女三の宮は朱雀院の娘で、朱雀院の出家にあたり光源氏の元へ嫁いだ。 20 「わたまし」とは古くは貴人の転居を意味し、ここでは女三の宮が六条院(光源氏の邸宅)に移り住むことを示す。引越しに際して、火難を避ける願いをこめて活ける花を「わたましの花」と呼ぶ。『いけばな総合大辞典』によると、火を連想する赤い花、「ひ」や「か」(「火」の音読み)と発声する文字を持つ花は使用せず、取り合わせてよいものは「白、青、黄色のもの」と水草の類」とする。

(香ノ木麻由)

三十五 ワカサ
若菜下

上の巻に、六条院にてかすめるくれ、春(ハル)の折(オリ)ふしおもしろきに、此御かたの庭(ニハ)にて御まりあり。2 ちもんのかみも参(マ)り

給ふに、みやのかはせ給ふねこ、いつくよりか、しらぬねこをひて、らうかはしくみすの内へいりてさはげは、人々追さわく。宮も立給へり。ねこのつなにて、みすあかりて御姿みえ給ふ。是より柏木通ひ給ふ事、源氏にもれ聞たり。

夕やみは道たとくし月まちてかへれ我せこ其まにもみん

若葉下

御伝曰、此形、幹に手鞆、柳、定法也。願の糸と云て、柳の枝一本、花器に添てたらす。此枝を習とす。猫の綱にたとへたり。此花、柳、無之時は外のものをかりて生、手まりの花を活るには、ぜひ柳か葉なきがづらか、花入口よりたらし活るを習とす。祝義の花と心得べし。十月廿日頃也。此巻、伝授こととす。

愚按曰、神祇の花也。「何事も住吉の神の恵」とある詞によれり。大葉、浦波にたとへて活事習あり。つり舟に数々あらまほし。「須磨、明石、難波のかたさまを見やりて」とあるによれり。又、鞆あそびあり。花の赤き色の大花を活る事、習あり。銚鞆は緋色也。又、かゝりといふは、鞆場に松、桜、柳等のものあり。柳にかきるべからす。かゝりの桜とも歌にあれば、小手鞆といふ桜なと活ること、おもしし。又、「猫の綱にてみすあがりて、御姿みえたまふ」といふ故事あれば、猫柳を活るも縁あり。又、「春の夕ぐれ」といふ詞によりて、柳、桜のすこし散かゝりたるをも活てよし。源氏、五十の御賀とて正月廿日はかり、春の夜のとかに霞むよ、御方々よび奉りて、御楽あり。是を女楽といふ。女三宮、きんの御琴、松か糸世か。紫上、和琴、糸世、六本也。笛は夕霧大将の御子、竹を生る。是等は楽に手だれなるを云。又、女三宮のみたて、青柳、青柳のはつかにしたり始て、うぐひすの羽風にもみだれぬへし。又、女御の君の御姿は藤也。こ高き峯より、あたりにならぶ花なく、さきこぼれた

藤の心地して、よしありて見え給ふ。又、紫43の上のみたては、桜梅サクラウメにたとへたり。是等コトヲは御かたちのめてたきに見たての花といふべし。

三十五 同 下 朝顔のさる院。柳、手鞠、大葉。

【訳】(若菜の)上巻において、六条院で霞たなびく夕暮れ、春の折節の趣があるときに、このお方(光源氏)の庭で蹴鞠が催された。衛門えもんの督かみ(柏木)も参上なさっていて、宮(女三の宮)の飼っていらつしやる猫を、どこからか(来た)見知らぬ猫が追いかけて、無作法に御簾の中へ入り鳴き騒ぐので、人々(女房たち)は(知らぬ猫を)追いつぐ。宮も立ちなされた。(飼い)猫に付けていた綱によって、御簾があがって(女三の宮の)お姿が見えなされた。これより、柏木が(女三の宮の元へ)通われることが、光源氏の耳に入った。

夕闇は(暗くて)道がはつきり見えません。月(が出るの)を待つてから帰ってください。私の恋人よ、(あなたの姿を)その間も眺めたいのです。

師伝によると、この形式は、中心に手鞠と柳(を活ける)と決まっている。願いの糸と言って、柳の枝を一本、花器に寄り添わせて垂らす。この枝を決まりとする。猫の綱にたとえている。この花と柳が無いときは、他のものを代わりに活け、手鞠の花を活けるときは、ぜひとも柳か、葉のない蔓かずらかを、花器の口から垂らして活けるのを定めとする。祝儀の花と心得るがよい。(祝儀は)十月二十日頃のことである。この巻は伝授を専らにする。

愚案によると、神祇の花である。「何事も住吉大社の神の恵み」とある一節に基づく。大葉を浦波にたとえて活けるのは習わしである。釣り舟(の花器)に(草花が)数多くあるのが望ましい。「須磨、明石、難波の方角を眺めて」とあることによる。また、(若菜上の巻では)蹴鞠の催しがある。花が赤色の大花を活けるのが、決まりであ

る。飾り鞠は緋色である。また、「掛かり」というのは、蹴鞠をする庭にある松、桜、柳などの木である。柳に限るべきではない。「掛かりの桜」とも和歌にあるので、小手鞠という桜などを活けても趣がある。また、「猫の綱によつて御簾が上がり、(女三の宮の) お姿が見えなされた」という事があるので、猫柳を活けるのもゆかりがある。また、「春の夕暮れ」という言葉により、柳や桜が少し散りかかっているのを活けてもよい。光源氏が(兄の朱雀院の) 五十歳の祝賀(の予行演習)として、一月二十日頃、春の夜のどかに霞む夜に、女君たちをお呼びになつて、音楽会を開く。これを女楽と言う。女三の宮は琴の御琴で、松か糸薄か(を活ける)。紫の上は和琴で、糸薄を六本(活けるの)である。笛は夕霧の大将の御息で、竹を活ける。これらは音楽の腕前が優れている人々を言う。また、女三の宮に見立てるのは青柳で、青柳がわずかに垂れ下がり始めて、鶯の羽風にも乱れてしまう(様子)であろう。また、女御の君(明石の女御)のお姿は藤である。小高い峰から、あたりに(藤に) 匹敵する花がなく、咲きあふれる藤のようで、風情があるようにお見えになる。また、紫の上の見立ては、桜と梅にたとえる。これらはお姿が美しいので、見立ての花というのである。

【注】 1 「上の巻に六条院にて、かすめるくれ、はるの折ふし、おもしろきに、此御かたの庭にて、御まりあり」(『小鏡』)。「源氏のもとにて、御まりありまいらせ候」(『龍野』)。六条院は光源氏の邸宅(21少女の巻の注18参照)。
2 「ゑもんのかみも参り給ふに、みやのかはせ給ふねこ、いつくよりか、しらぬねこをひて、らうかはしく、みすの内へいりてさはけは、人々おひへさはく」(『小鏡』)。「柏木のゑもんもまいり給ひしに、女三の宮のかわせし猫を、しらぬねこの来りて追ければ」(『龍野』)。「小鏡」との本文では、女三の宮の飼ひ猫が見知らぬ猫を追うとも読めるが、『龍野』は物語と同じでよその猫が飼ひ猫を追う。 3 「宮も立給へり」(『小鏡』)。女三の宮が立ち上がったの

は、テキストではあたりが騒然としたからと解釈できるが、物語は異なる。物語では庭で貴公子たちが蹴鞠を興じているのを、女房たちが簾の前で見ているため、立ち上がらないと見られなかったから。ただし高貴な女性が立つのは、無作法なこととされた。 4 「ねこのつねにて、みすあかりて、御すかた見え給ふ」(『小鏡』)。「綱にてみすの(前巻)あかりしとき、見そめたまひ、柏木、かよひそめしに、源氏にもれきこへしを」(『龍野』)。高貴な女性は男性から姿を見られないように用心して、部屋の奥に座っている。端近にいた女三の宮の立ち姿を夕霧は軽薄と思ったが、柏木は一目惚れした。 5 巻名歌。『小鏡』も『龍野』も同文。『万葉集』(巻四・相聞・七二・大宅娘女)の歌とは本文が少し異なり、『古今和歌六帖』所収歌(巻一・三七一)と同じ。光源氏は「さらば、道たとたとしからぬほとに」と、この歌を引き、女三の宮のもとから帰ろうとしたが、女三の宮に「月待ちて、とも言ふなるものを」と言われて留まる。その翌朝、光源氏は敷物の下に隠された柏木の手紙を見つけ、二人の密通に気づく。 6 「此形、身木、手まり、柳、定法なり」(『龍野』)。手鞠は初夏に、白色の小さな花が多数集まり球状に咲く。若菜の上巻で、柏木は蹴鞠の最中に女三の宮の姿を見て、密かに通い始める。手鞠を活けるのは、鞠のように球状に咲く花の形を、蹴鞠の鞠に見立てたから。 7 「手がいの糸と申て、柳のほぞ枝一本、花入にそへて、下へたらし候」(『龍野』)。テキストの本文は「願いの糸」、『龍野』は「手飼いの糸」と異なる。「願いの糸」とは七夕に願いを込め、竹の竿の先に付けて織女星にたむける五色の糸のことで、『太平記』に「竹竿に願糸を懸け」とある。一方、「手飼い」とは生き物を自分の手で飼うことを言い、「手飼いの糸」とは飼っている生きものを繋ぐ糸のことで、この場合は女三の宮の宮の飼い猫に付けた綱を指す。 8 「此枝を習と申也。右の巻の心なり。猫のつななり。それを手かいの糸と申なり」(『龍野』)。テキストの「ねがいの糸」は、「てがいの糸」の読み間違えであろう。 9 「此花、柳なくは、外の物を借り

て生。手まりの花生るには、せひ柳か、葉なきかつら(葉)か、花入の口よりたらし申事、習とするなり」(『龍野』)。「かづら」は蔓草の総称。柳も蔓も細長い植物で、猫の綱に例える。柏木が密通するきつかけとなつたのは蹴鞠と猫であるため、蹴鞠に見立てた手鞠花と、猫の綱になぞらえた柳か蔓を一緒に活ける。

10 「祝義(祝儀)なり」(『龍野』)。「祝儀の花とは、祝い事の席に用いるたて花、立華、生花などをいう。『いけばな総合大事典』によれば、その花材は季節の花を中心用いるが、適切なものがないときには常緑樹、なかでも松を用いるという。また、花材は枯れ枝、枯れ葉、破れ葉のないものを選ぶ。祝いの花を用いるのは、光源氏が住吉を参拝して、一門の繁栄を祈つたことによる。

11 「頃(ころ)は十月廿日の日」(『小鏡』)。住吉詣では十月二十日に行なわれた。

12 神祇の花を活けるのは、光源氏の娘(明石の女御)が産んだ子が東宮になつたので、光源氏が住吉へお礼参りをしたことによる。『いけばな総合大事典』によると、神前の花には榊を用いるのが古く、のちには松を用いるようになる。

13 「なに事も、すみよしの神(かみ)のめぐみの有かたくおほえて」(『小鏡』)。明石の女御の子が東宮になつたことを、光源氏は住吉の神の恵と考えた。また、明石の入道も住吉の神へ立願を行なつていた。

14 住吉は撰津国の歌枕で、松、波、神と共に詠まれることが多。波が松を洗う様子や岸に寄る波が歌われ、大葉を浦波に見立てるのは住吉の海の景色を表現するためであろう。

15 「釣り舟」は船の形をした舟形花器を鎖で釣つて飾つた、活け花の飾り方。釣り舟は、住吉社が海上安全の守護神として信仰されたことによる。

16 「すみよしにて、むかしの須磨(すま)、明石(あかし)、なには(難波)のかたさまを見やりて、心しるとおもひ出しつる心をつくへし」(『小鏡』)。須磨・明石・難波は住吉と同じく、海辺の風景が広がる地である。

17 赤い大輪を活けるのは「鍔鞠は緋色なり」の一文によるが、蹴鞠の鞠は鹿の皮で作られ、白色か茶色が多い。ただし唐鞠は、五色の革を縫いあわせて製される。あるいはこの飾り鞠は、丸めた綿を芯にして表面を色系で飾る手まりか。

18 「掛かり」は蹴鞠をする場所に植えられた樹木を言い、北東に桜、南東に柳、北西に松、南西に楓を植えた。 19

たとえば『続後撰和歌集』の詞書に、「参議雅経うゑおきて侍りけるまりのかかりのさくらを思ひやりてよみ侍りける」(雑上・一〇四三・藤原教定朝臣)とある。 20 桜の品種の一つ。花は長い枝の先に手鞠状に群がって咲き、花

の色は紅色で八重咲き。江戸時代の園芸書『地錦抄』(一七〇〇年前後に刊行)の「桜のるいの章」に、「小手鞠」
「大手鞠」の記述がある。 21 「故事」の内容については、注4参照。江戸時代の書である『本草綱目啓蒙』(一八〇

五年刊行)に「ネコヤナギ」の項がある。枝に芽鱗でおおわれた冬芽がつき、早春に気温が上がると芽鱗が脱落し、
その下から灰白色の苞におおわれた花穂が現れる。『いけばな総合大辞典』によれば、このときのつぼみの状態が、

猫が丸くうずくまっている姿に似ているので、猫柳と名付けられたという。 22 「春のゆふくれ」(『小鏡』寄合

語)。柏木は春の夕暮れに女三の宮を垣間見た。 23 「柳桜」は、柳と桜の混ざり合っている景色を表現する語。例、

「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」(古今和歌集・春歌上・五六・素性法師)。柳と桜を活けるのは、
蹴鞠を行なう場に柳と桜が植えられており(注18参照)、また物語において桜が散りゆく様子が描写されていること

による。 24 「五十の賀」は、五十歳を迎えた人を祝う儀式。光源氏は、兄の朱雀院の五十の賀を行うことを計画す
る。 25 「正月廿日はかりなれば、春の夜、のとかにかすむ夜、御かたくをよひたてまつりて、御楽あり。これを

女かくといふ也」(『小鏡』)。「女楽」は朱雀院の五十の賀において、女三の宮が琴の琴を披露することになり、その
予行演習として六条院に住む女君たちが行なった演奏会。女三の宮のほか紫の上は和琴、明石の御方は琵琶、明石の

女御は箏の琴をそれぞれ奏でる。箏は中国伝来の楽器で、十三本の絃からなる。 26 「女三の宮のきんの御琴」(『小

鏡』)。琴の琴は中国から伝わり、諸楽器の中で最も重んじられた。絃は七本。女三の宮は光源氏と結婚する前から、

父の朱雀院から琴の琴を教わっていた。27糸薄は薄より全体的に小型で葉が細く、琴の絃に見立てたか。松は琴を表す。「琴の音に峯の松風通ふらしいづれのをより調べそめけん」（拾遺和歌集・雑上・四五一・斎宮女御）の歌にも、松と琴が詠み合されている。28「むらさきの上はわこん」（『小鏡』）。和琴は、日本固有の楽器で絃は六本。

29六本の糸薄は、絃が六本ある和琴になぞらえる。30「ふえは夕きりの御子」（『小鏡』）。笛は夕霧の長男が演奏した。当時の女君は管楽器をたしなまないで、少年が笛を担当した。31竹から笛を作るので、竹を笛に見立てた。

また、『いけばな総合大事典』によると、竹は伝統的な花材で祝儀に使われ、松や梅と組み合わせられた。32「女三の宮の御かたちは、二月中の十日はかりの青柳の、はつかにしたりはしめて、うくひすのは風にもみたれぬへし」（『小鏡』）。光源氏は演奏する女君たちを見て、各人を花に喩える。女三の宮の小柄でかわいらしく気品のある様子は、鶯の羽風にも乱れてしまいそうなか弱い青柳に例えられた。青柳と鶯については、「依依嫋嫋、復た青青。勾引

す、春風、無限の情。白雪、花繁くして空しく地を撲ち。緑糸、条弱くして鶯に勝へず」（『白氏文集』卷六十四、「揚柳枝詞」八首の第三首）に例がある。33「女御のきみの御すかたは、こたかき峯より、あたりにならふ花なく、さきこほれたる藤の心ちして、よしありて見え給ふ」（『小鏡』）。34「むらさきの上は、大ききなとよき程にて、やうたい

あらまほしく、あたりにもほひみちて、花といは、さくら、梅にたとへても、なを物ことにすくれたり」（『小鏡』）。

（塚本舞衣）

三十六 柏木

此卷柏木と云事、月卿雲客を、月日星雲、かすみ、先、よろつの木草になぞらふるに、ゑもんのかみを柏木によそへ

たれば、さて、柏木^{カシハキ}と云也^{イフ}。扱²、此人^{ニヒヨサン}、女三^{メヤ}の宮^{ミヤ}の事^{コト}ゆへに病^{ヤマヒ}かきりになりて、いまはのをり、大納言^{オウナゴン}になさる。

いまはとてもえんけふりもむすほ、れたへぬ思^{オモ}ひの猶^{ナウ}や残^{ノコ}らん

女三⁵宮、是^{コト}をけふりくらべといふ。

たちそひてきえやしなましようき事^{コト}をおもひ乱^{ミダ}る、煙^{ケブリ}くらへに

柏木

御伝^{ミツタツ}ニ曰^{イハク}、此形^{コノカタ}、大葉^{オホハ}に時節^{シセツ}の花^{ハナ}を時雨笠^{シグレカサ}の形^{カタ}のやうに、大葉^{オホハ}の下^{シタ}に生^{イダ}る也^{ナリ}。祝義^{シウギ}に用^{モト}ふべからず。柏木^{カシハキ}、女三^{ニヨウサン}の宮^{ミヤ}

の事故^{コトヰ}に、病^{ヤマヒ}かきりになりて、いまはのをり、大納言^{オウナゴン}になさると心得^{ココロウケ}へし。

愚按^{ウケアヒ}ニ曰^{イハク}、其心^{ココロ}をほのめかして、酒^{サケ}をしゐて、御心^{ミココロ}よらぬ御めつかひをし給^{タマヒ}しより云云^{イハク}。竹葉^{タケハ}、桃^{モモ}、菊^{キク}、皆^{ミナ}、酒^{サケ}に

よせあり。さて、雲井^{クモイ}の雁^{ガニ}に遺言^{ユイゴン}ある巻^{マキ}なれば、飛雁^{トビガニ}を落雁^{ラクガン}にも、ハサミ入^{イル}へし。少^{オウ}ししほる、かたよし。又^{マタ}、

岩根^{イワネ}の松^{マツ}といふ活方^{イケカタ}あり。

誰²¹か世^セにかたねはまきしと人^{ヒト}とは、いか、岩^{イワ}ねの松^{マツ}はこたへん

右²²広^{ヒロ}口^{クチ}に松^{マツ}を活^{イケ}、岩^{イワ}にてとめる也^{ナリ}。又^{マタ}、煙競^{エンキョウ}べとて、柳^{ヤナギ}を二本^{ニホン}さすことあり。習^{ナラヒ}あり。二瓶²⁶も又^{マタ}よし。両方^{リウホウ}、

柳也^{ヤナギナリ}。

三十六 柏木^{カシハキ}(病痾^{ヤマヒ}) 頭^{カビ}のなひしの介^ケ。大葉^{オホハ}、時節^{シセツ}ノ花^{ハナ}、竹葉^{タケハ}、桃^{モモ}、菊^{キク}、柳^{ヤナギ}。

【訳】 この巻^{マキ}を柏木^{カシハキ}ということは、公卿^{クウケイ}と殿上人^{テンジョウジン}(の役職^{ヤクシヨク})を、月^{ツキ}・日^ヒ・星^{ホシ}・雲^{クモ}・霞^{カスミ}・松^{マツ}など、さまざまな草木^{ソコノキ}にた

とえるが、衛門督^{エモンノカミ}を柏木^{カシハキ}になぞらえるので、それで柏木^{カシハキ}(の巻^{マキ})というのである。さて、この人^{ヒト}(柏木^{カシハキ})は女三^{メヤ}の宮^{ミヤ}

との密通^{ヒソカニカウ}により重体^{オモシロミ}に陥^{オチ}り、臨終^{リンシュウ}の折^セ、(今^{イマ}上帝^{カミ}が柏木^{カシハキ}を)大納言^{オウナゴン}に(昇進^{ノボリ})なされる。

今は（もう最期）と（私を火葬にする）煙も燃えくすぶって、（あなたへの）絶えない思いの火はどこまでも残るだろうか。

（その返歌は）女三の宮で、これを煙競べという。

（あなたの煙と）一緒に（私も）消えてしまおうかしら。つらい事を思い乱れ、火が乱れる煙と（あなたの煙と）比べるためにも。

師伝によると、この形式は大きい葉に季節の花を（合わせ、大きい葉を）時雨笠の形のようにして、大きい葉の下に（花を）活けるのである。お祝い事に用いてはいけない。柏木は、女三の宮との密通により重体に陥り、臨終の折に大納言に（昇進）なされると心得なさい。

愚案によると、（光源氏は、自分の正妻である女三の宮の密通に気づいたという）その心をほめかして、（柏木に）お酒を強いて、ご機嫌が良くない目つきをなされてから云々。竹葉・桃・菊は、みなお酒にゆかりがある。さて、（柏木の異母妹である）雲居の雁に（柏木の）遺言がある巻なので、飛雁を落雁にも挟はさんで入れるのがよい。少ししおれる有様がよい。また、岩根の松という活け方がある。

「誰がこの世に種を蒔いたのか（実父は誰なのか）」と人が尋ねたならば、この岩根の松（である若君）はどう答えるでしょうか。

右記（の和歌の内容を表現するに）は口が広い花器に松を活け、岩で留めるのである。また、煙競べといって、柳を二本さすことがある。（それには）決まりがある。二瓶（を使うの）も、またよい。両方（の瓶に）、柳（を活けるの）である。

【注】 1 「此巻、かしは木と云事。月卿雲客を、月、日、星、雲、かすみ、まつ、よろつの木草になぞらふるに、ゑもんのかみを、かしは木によそへたれば、さて、かしは木と云なり」(『小鏡』)。「月卿雲客」とは、公卿(三位以上)と殿上人(四位、五位)の総称。柏木はブナ科の落葉高木で、樹木を守る神が宿ると信じられていたので、皇居を守護する衛門の異称になる。 2 「扱、此人、女三の宮の事ゆへに、病かきりになりて」(『小鏡』)。「衛門もおもひわづらひ」(『龍野』)。柏木は女三の宮と密通し(35若菜下の巻の注4)、それに気づいた光源氏に皮肉を言われたことを気に病んで重病に陥る。 3 「いまはのおり、大納言になさる」(『小鏡』)。柏木の臨終が近いと聞いた今上帝は、柏木を衛門督(従四位)から権大納言(正三位)に昇進させた。その喜びから、もう一度参内できるかもしれないと考えたことによる特別待遇であったが、柏木は二度と回復しなかった。 4 巻名歌。『小鏡』も『龍野』も異同なし。死を悟った柏木が、女三の宮に贈った和歌。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。火葬の煙は燃えくすぶつて残るように、相手への思いはこの世に残るという意味で、柏木の執心を表す。 5 「女三の宮の「けふりくらへ」とは申けれ」(『小鏡』)。「思ひ」の「火」から煙が立ちのぼるように、互いに思いの程をくらべ合うことをいう。 6 『小鏡』と同文。「立ちそひてきへやしなましうきこと」との歌(『龍野』)。柏木が、自分の死後も女三の宮への思いは煙のように残るだろうと詠んだのに対して、女三の宮は私もその煙とともに消えてしまいたいと返す。「煙競べ」は二人の嘆きの象徴。 7 「此かた、大葉に時節の花を、時雨笠の形のやうに、大葉の下に生るなり」(『龍野』)。時雨は、晩秋から初冬にかけて降ったりやんだりする小雨。時雨笠は時雨を防ぐ笠。大きい葉を笠に見立てて、その下に時節の花を活ける。「涙を雨によそへて、時雨笠の心をとり生る也」(『龍野』)とあるように、時雨は柏木の死を悲しむ人々の涙になぞらえる。 8 「無祝義也」(『龍野』)。柏木の死を描く場面であるため、祝い事には使わない。 9

注2を参照。 10 注3を参照。 11 「けんし、すこし其心をほめかして、酒をしるて、御心よからぬ御めつかひをし給ひしより」(『小鏡』)。物語では、35若菜下の巻で行われた試楽で光源氏から皮肉を言われた柏木は、女三の宮と密通したという罪の意識で気分が悪くなり、酒が進まないのを光源氏は見咎めて酒を強要する。 12 竹葉は竹の葉、また酒の別名。 13 桃の花は、日本では桃の節句に活ける。また桃の実は、日本では古くから邪気を払う靈的なものであるとされ、『古事記』には伊弉諾尊が黄泉国から逃げ帰った際、桃の実のお陰で難を逃れた話がある。また、桃太郎が鬼を退治するのも、桃が邪気を払うと信じられたからである。 14 菊は中国から渡来した植物だが、日本で改良が進み、近世には多くの品種があり、葉用・食用・鑑賞と幅広く使用される。 15 竹葉・桃・菊のすべてが、酒にゆかりがある。竹葉は、「甕もたひの頭の竹葉は春を経て熟す。階はしの底もとの薔薇しょうびは夏に入つて開く」(和漢朗詠集・夏・首夏・一四七・白居易)と詠まれたように、酒の異称である。桃は中国で、三月三日の上巳じょうしの節句と関連付けられ、その日に曲水の宴が行われた。それは宮中や貴族の邸宅で行われた行事で、庭園にある曲がりくねった川の流れに沿って参会者が所々に座り、上流から流される杯が自分の前を通り過ぎないうちに詩歌を詠めれば、杯を取り上げて酒が飲める。このことから、桃と酒にゆかりがあるとす。菊は、旧暦九月九日の重陽の節句に用いられた。古来中国ではこの日に小高い丘に登り、長生きの効能があると言われる菊の花を浸した菊酒を飲み、厄除けをする風習があった。これが日本にも伝わり、宮廷行事として菊の宴が催された。 16 「限のおり、夕さりの大将は、かの大納言のいもうとむこそかし。雲井のかりは、いもうとなり。いとなかよき事なれば、よひよせ給ひて、さま〜にいひをき」(『小鏡』)。物語と『小鏡』では、柏木が臨終の際に遺言を残したのは異母妹である雲居の雁ではなく、雲居の雁と結婚した、すなわち妹婿の夕霧である。テキストは『小鏡』を読み誤ったか。 17 飛雁とは、特に未生流においてよく見ら

れる表現法で、竹の二枚の葉の間に芽吹き葉があるものを言う。ここでは雲井の雁に遺言を残したため、「雲井の雁といふ故事」(21少女の巻の注17)に関わる飛雁を用いる。 18 「落雁」は葉を落とした竹で、亡くなる柏木になぞらえたか。 19 亡き柏木を悲しむ巻なので、少ししおれた姿を良いとする。 20 「岩根の松」という言葉は、女三の宮が産んだ男児(薫の君)の五十日の祝いの時に、光源氏が女三の宮にこっそり詠みかけた和歌(注21)にある。五十日の祝いとは、子どもが生まれて五十日目に行う祝宴。 21 「小鏡」にも掲載。この和歌は、「梓弓いそべの小松たが世にかよるづ世かねて種をまきけむ」(古今和歌集・雑上・九〇七・よみ人しらず)による。「岩根の松」の「岩根」は「言はね」を連想させ、「松」は本歌の「小松」により薫の君を指す。光源氏は薫の出生の秘密を匂わせる歌を女三の宮に詠みかけて、相手の心中を推し測ろうとした。 22 「広口」は広い口をした花器のことで、高さにくらべて口付きが大きいものを指す。「右広口」とは花器の左側に草花を寄せて右側を広くした、とも解釈できる。 23 松は『いけばな総合大事典』によると、「祝言などの立華につかわれる花材として、格式の高いものとされていた」とあり、ここでは薫の五十日の祝いとして松を活けた。「岩にてとめる也」とは、花が流れないように活けるための技法の一つである。『いけばな総合大事典』では「石留め」という方法を紹介しており、「もちいる草木に相応する石をみたて、石と石とを寄せ合わせて草木の根を留める方法と、すわりの良い石をみたてて、その石の下に草木の茎を踏ませて留める「踏み留め」とよばれる方法」があるとす。光源氏が詠んだ和歌に「岩根の松」があることを踏まえて、松を岩で留めた。 24 注56を参照。 25 二本の柳で煙競べを表現する。柳を用いるのは、女三の宮を柳にたとえたから(35若菜下の巻の注32)、また柳が煙の有様に似ているからか。 26 二つの花器を並べ、それぞれに柳を活けて煙競べによそえる。

(香ノ木麻由)

三十七 横笛

柏木¹の衛門²の妻、落葉³の宮は多もんに遠く御わかれ給ひ、御こゝろのほど、いとあはれにおはしまし、折⁴ふし、中秋⁵の月夜⁶、夕霧⁷の大將御尋ね有しに、衛⁸もん、今はの時⁹まで持給ひし横笛¹⁰を出し、大將に進め給ければ、しらべ玉¹¹ひて、哀¹²を催し、よみ給ひし御歌あり。「笛竹¹³にふきよる」との夢¹⁴のつたへにて、横笛¹⁵の巻¹⁶とはいふ也。

横笛のしらべは琴にかはらぬをむなしく成し音社¹⁷つきせぬ

横笛

御伝¹⁸曰、幹竹¹⁹也。竹二本、節の上、一寸三歩程置、切留²⁰も竹のふしの本枝²¹に葉七八枚置べし。図²²の如くあしらひ、草²³はあしく、木²⁴花²⁵、躰²⁶は木草²⁷通用の物を生へし。前²⁸に鳶尾²⁹三本、花入³⁰の口³¹江³²そへて垂³³へし。是³⁴をおよび葉³⁵とて定て習³⁶ひ也。此形³⁷は一重切³⁸の花入³⁹、定⁴⁰る也。ひとよきり、尺八⁴¹ともいふ也。其⁴²うしる根也。竹⁴³を用⁴⁴るは、横笛⁴⁵に始ると心得⁴⁶べし。八月十五⁴⁷、六日の頃⁴⁸の事也。

愚按⁴⁹曰、一節⁵⁰切は、ふし一つこめたる尺八⁵¹に似たる笛也。もろこしにては、トウシヤウといふ。赤壁⁵²賦⁵³にもみえたり。双鳧⁵⁴連⁵⁵の曲⁵⁶を吹給ふ。又、葎⁵⁷、草花⁵⁸、数⁵⁹く活⁶⁰るもよし。笛⁶¹を虫⁶²のこ多といふ。草⁶³あまた活⁶⁴れば、自然⁶⁵虫のね⁶⁶はこもると心得⁶⁷へし。

露⁶⁸しけき葎⁶⁹のやとにいにしへの秋⁷⁰にかはらぬむしのこ多かな

三十七 横笛。おちの内大臣。歌口⁷¹をかくすならひ葉。竹⁷²、葎⁷³、草花⁷⁴数々。

【訳】 柏木の衛門の妻である落葉の宮は、衛門（柏木）と遠くお別れ（死別）なされて、お気持ちの有様が、たいそ

うおいたわしかった頃、中秋の名月の夜、夕霧の大將が(落葉の宮を) お訪ねになり、柏木が臨終の時までお持ちになつていた横笛を(落葉の宮が) 取り出し、夕霧の大將にお勧めになつたところ、(夕霧の大將が横笛を) 演奏なされて、情緒をひき起こしお詠みになつた御歌がある。「笛竹に吹き寄る」との(夕霧が見た) 夢のお告げによつて、横笛の巻とはいうのである。

横笛の調子は特に変わりませんが、はかなく消えた(故人が吹き鳴らした) 音色が尽きることはないでしょう。師伝によると、中心は竹である。竹は二本で、(中心の一本は) 節の上を一寸三步(四センチ弱) ほど置き、支え(の竹) も竹の節の元の枝に葉を七、八枚置くのがよい。図のようにあしらい、草は不都合で、木の花や、姿が草木に似通うものを活けるのがよい。前に鳶尾を三本、花器の口に添えて垂らすのがよい。これをおよび葉といつて、決まつたしきたりである。この形式は一重切りの花器(に活ける) と、決まつているのである。一節切りは、尺八(中国では洞簫^{トクシヨウ}という楽器である) ともいうのである。その後ろ根(締め) である。竹を用いるのは、横笛(の巻) から始まると心得なさい。八月十五、六日頃のことである。

愚案によると、一節切りは、節が一つ含まれている尺八に似た笛である。中国では、洞簫という。「赤壁の賦」にも見られる。夕霧の大將は想夫恋の曲をお吹きになる。また、律や草花をいろいろ活けるのもよい。笛(の音) を、虫の声という。草をたくさん活ければ、自然と虫の音はこもると心得なさい。

(涙に劣らず) 露がたくさんおおりて草が生い茂つた我が家に、昔の秋と変わらない虫の声が聞こえる(ように、故人と変わらない笛の音を聞かせてもらいました) なあ。

【注】 1 「かのゑもんのかみの北のかた、おちのはの宮をは、一条の宮とも申。ゑもんの死し給ひて後、あはれとおも

ひし中のかたみなれば」(『小鏡』)。「柏木の衛門の妻、おちのはの宮は、(衛門)ゑもんに遠く御わかれありし御心のほど、いとあわれにおはしまし候。折ふし」(『龍野』)。柏木の北の方である落葉の宮は、亡夫を偲びながら暮らしている。

2 「八月なかはの月」(『小鏡』)。「仲秋の月の夜」(『龍野』)。陰暦八月十五日、仲秋の名月の日である。3 「大将

まいり給ひて」(『小鏡』)。「夕霧の大将、御尋ねありしに」(『龍野』)。夕霧は落葉の宮が気になり、たびたび訪問していた。4 「内より笛を取出して、大将にすゝめ給ふ」(『小鏡』)。「衛門、いまわの時(今)まで持給ひし横ふえを

いたし、大将にすゝめ給ひ候へは」(『龍野』)。物語では落葉の宮の母親が、柏木の形見である笛を夕霧に渡す。5

「しらへ給ひて、あわれをもよふうし給ひし御歌、ありまいらせ候」(『龍野』)。夕霧は、柏木の笛を試しに吹く。

6 「笛竹にふきよる」との夢のつたへにて、横笛の巻と申にてこそ候へ」(『龍野』)。「笛竹に吹き寄る」は、夕霧の夢に出てきた柏木が詠んだ和歌「ふえ竹にふきよる風のことならばすゑのよなかきねにつたへなん」(『小鏡』)の一節で、この笛の音が吹き寄せる風に乗りどこかに伝わって行くのならば、末永く私の子孫に伝えてほしい、という意味。柏木と女三の宮の息子である薫は笛を伝えてほしい、という柏木の思いが込められている。薫は世間では、光源氏の子とされている。7 卷名歌。『小鏡』も『龍野』も同文。夕霧が、注25の和歌に対して詠んだ返歌。「むなしく成し音」は、亡き柏木が吹いた笛の音のこと。8 「此かた、身木、竹なり」(『龍野』)。「いけばな総合大事典」によると竹は伝統的な花材であり、竹の節目をいかして世を継ぐという意味をもたせて使われていた。ここでは柏木の横笛(竹製)を表すだけではなく、笛を薫に継承してほしいという柏木の心情も踏まえるか。9 「竹二本、節上一寸三分程置、切留、そのふしの所に、枝もとの葉、七、八枚置べし」(『龍野』)。「いけばな総合大事典」には、「タケの状態にあわせてタケの上部の切り方についての定めがあった。タケの上というのは末ともいい、末を切りどめにす

るときの寸法なども、横に出る枝からどのくらいなどと長さをもさだめていた」とある。この場合は、竹の節から四センチほど間隔をあけて切るということか。「切留きりどめ」とは、主に少し高さがある花器に投げ入れ的花を活ける時に使用する手法。草木を傾けて活けるため、花器内の壁と花器口の二点で固定するので、草木はその切り口が花器の内壁に沿うよう斜めに切って用いる。切り口を花器の内壁に沿わせ、そこを支点として草木を花器口にもたれさせることで角度が固定できる。18松風の巻、注8参照。10「図のこことく、応答に草(ならず)はならず、木花、扱は木草へ通用物を生べし」(『龍野』)。「木草に通用の物」とは、草と木の両方の性質に通じる花材のこと。『いけばな総合大事典』の「通用物つうようぶつ」項では、「種々の草木を取り合わせる立華の拵えにおいて、木のもものは木に、草のもものは草に縁が切れないようにつづけなければならない大切な習いがある。」とする。和歌では、「木にもあらず草にもあらず竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり」(古今和歌集・雑下・九五九・よみ人しらず)のように、竹は木でも草でもない植物とされるが、活け花においては竹は木にも草にもなるため、取り合わせの花材も通用物にする。11「前(前尾)へしやか三本、花入の口へそ(添えて)多(垂らす)てたらずべし」(『龍野』)。鳶尾はアヤメ科の多年草。『大和本草』には「紫羅傘イチハツ」の項に「又鳶尾ト云」として、「鳶尾ハ、イチハツナル事分明也。(中略) いちはつは茎短く葉ひろく花紫に燕子花に似たり」とある。12「是を、お(置いカ)、ひ葉とて、定る習なり」(『龍野』)。鳶尾の葉を垂らすことをテキストは「および葉」、『龍野』は「おひ葉」で本文が異なる。「およぶ」は及び腰のように、腰を曲げ手を伸ばすような不安定な姿勢を指す意味を持つ。ここでは葉の様子をそのような姿勢になぞらえたか。一方、『龍野』の「お、ひ葉」は、花器の口を覆うように垂らす葉、という意味か。13「此かたは、一ト(一重切)多切の花入に定る也」(『龍野』)。一重切りとは竹製の花器で、活け口が竹の胴の部分に一つ切り開けられたものの総称。14「一ト(一重切)多切と言により、尺八共いふ也」(『龍野』)。テキストの

「二節切り」は尺八の一種である竹の笛のように、節が一つある花器のこと。また尺八切りという花器は、楽器の尺八のように反っている竹を尺八に見立てたもので、置き活け用と掛け活け用があり、『龍野』の図には「掛花納」と記されている。「銅簾」は、中国の管楽器である洞簾しゅうしやうのこと。約六〇〜八〇センチの真っ直ぐな竹管の上端に、歌口（笛、尺八などの口にあてる孔のこと）を設けた笛。日本では、尺八の別名にも用いる。15 『いけばな総合大事典』の「後ろ根締め」項によると、「投入花や生花の下端足元につかかって花姿をひき締める花材とその働さを根締め」と呼び、根締めを後ろにつけた場合のことを後ろ根締めという。ここでの「うしろ根」は、後ろ根締めのことか。16 「其後、根ほり竹など用ゆるは、此巻、横笛より始り用ゆる也」(『龍野』)。竹を用いるのは、巻名の横笛が竹で作った笛であり、柏木の遺愛の笛を夕霧が受け取ったことによる。「根ほり竹」は根が付いたままの竹のことで、安定して活けやすいために用いたか。17 注2参照。ただし物語では「秋の夕べ」(三五二頁)で日を特定していないが、「月さし出でて曇りなき空」(三五四頁)とあるので、中秋の名月(旧暦八月十五日)の頃としたか。18 『日本国語大辞典 第二版』によると、尺八は縦吹管楽器で、管の上端の外側を斜めに三日月形にそぎ取って作られた歌口に、直接唇を当てて吹奏する。また尺八には、奈良時代に中国から伝わり平安中期ころまで使われたもの、室町中期に南中国から伝来したもの、江戸時代から現在に至るまで使用されているものがあり、中でも室町中期に伝来したものを一節切という。一節切は長さが約三三センチで、根に近い方を歌口とし、真ん中よりやや歌口より節が一つあることから一節切と呼ばれる。19 注14を参照。20 「赤壁ノ賦」に、「客に洞簾を吹く者有り、歌に倚りて之に和す」とある。「赤壁ノ賦」とは北宋の詩人で、唐宋八家の一人である蘇軾が、武漢市の西にある赤鼻山を遊覧した際、そこを古戦場の赤壁と誤って作った漢詩で、名文の誉れ高い。正しくは湖北省嘉魚県の西、長江の南岸にあり、三国時

代に孫権・劉備の連合軍と曹操軍とが戦った。 21 「さうふれん、ふき給ひてさうふれんは、ひわをひき」(『小鏡』)。「想夫恋」は雅楽の唐楽、平調の曲。元々は「相府蓮」という漢字があてられ、相府は大臣官邸を意味する。晋の時代の大匠である王儉が蓮の花を植えて愛でた時の曲とも、王儉が一時失脚し、後に清廉だとわかつて返り咲いたのを清廉な蓮の花に喩えた曲ともいう。のちに「想夫恋」という漢字があてられ、男性を思慕する女心の曲と解されるようになった。この場合は、落葉の宮が亡夫である柏木を偲ぶ曲になる。物語では琵琶、『小鏡』では笛で想夫恋を夕霧が演奏し、落葉の宮も琴で合奏する。 22 「葎」は、広範囲に生い茂って草むらを作る草の類。「草花、数々活くる」とは、物語の「落葉の宮邸の」前栽の花ども、虫の音しげき野辺と乱れたる夕映えを見わたしたまふ(三五三頁)の場面を、活け花で表現したのであろう。 23 文楽や歌舞伎などでは、鈴虫などの鳴き声を笛の音で表し、その擬音を「虫の音ね」と呼ぶ。 24 生い茂った草の中に虫がいることを暗示する、と解釈できる。それに対して『龍野』の本文は異なり、「コノ花、草類ならぬと云は、草にうもる、と云心、うもる、れは、音の出ぬと云ヲ嫌ふナリ」で、それによれば草の類を活けると、虫の音がこもって聞こえなくなるので避ける、という意味になる。 25 『小鏡』にも掲載。物語では落葉の宮の母が、『小鏡』では落葉の宮が夕霧に詠んだ和歌。「葎の宿」は、夫に先立たれ荒廃した落葉の宮邸を指し、「虫の声」は笛の音に喩える。 26 「コノ前へたらす葉は、歌口ヲお、ひカクスノ心ナリ」(『龍野』)。「歌口」は注14参照。ここでは笛を吹くとき、歌口を口で覆うことを、花器の口を葉で覆うことで表すか。「ならひ葉」の「ならひ」は、「習ひ」か「並び」か不明。

此卷は、八月十五夜月のおもしろくすみわたりにて、かきりなく哀なれば、六条院はうそぶきなかめ給ひて、入道の宮の御かたへ光る君、御音つれおはしまして、月御覧するに、御前のせんざいに、はなたれたるむしとものの中に、すゝむしの花やかにさきければ、むかしと今のこゝろをこめて読給ひし歌あり。それを名とせり。

こゝろもて草のやとりをいとへとも猶鈴むしのこゑそふりせぬ

鈴虫

此形を御伝には、草花斗賞翫にする也。上の山萱の葉つかひ、手づま大事也。八月十五夜の月とみるへし。巻に曰、「月のおもしろくすみわたりにて、かきりなく哀なれば、六条院はうそぶきなかめ給て」とあれは也。

愚按に、白菊を高く活るもよし。又、白花を月としたるもおもしろし。又、鈴菜をいくる、鈴むしにたとへたりと心得へし。

三十八 鈴虫 雲井のかりの君。山萱、草花、白菊、鈴菜。

【訳】この巻は、八月十五夜の月が趣深く澄みわたって、この上もなく情趣があるので、六条の院（光源氏）は詩歌を口ずさみ物思いにふけりながら（月を）見ておられて、入道の宮（女三の宮）のお部屋を光源氏がお訪ねになり、月をご覧になると、お庭の植え込みに放たれている虫たちの中に、鈴虫がはなやかに鳴いたので、昔と今の気持ちをごめてお詠みになった和歌がある。それを（巻の）名とした。

（自分の）意志で草の宿りを嫌った（ように六条院を嫌って出家した）けれども、それでもやはり鈴虫の声（の）ようなあなたの声）は古びていないなあ。

この形式を師伝では、草花だけ観賞するのである。上の山萱の葉遣いは、腕前が大事である。八月十五夜の月とみる

のがよい。この巻に、「月が趣深く澄みわたつて、この上もなく情趣があるので、六条の院(光源氏)は詩歌を口ずさみ物思いにふけりながら(月を)見ておられて」とあるからだ。

愚案では、白菊を高く活けるのもよい。また、白い花を月としたのも趣深い。また、すずな菘を活けるのは、鈴虫に喩えていると心得なさい。

【注】 1 「此巻、す、むしと云事は、八月十五日夜の月のおもしろくすみわたりにて、かきりなくあはれなれは」(『小鏡』)。「頃は八月十五夜の月に」(『龍野』)。旧暦八月十五日の夜は中秋の名月とされ、月見の宴が行われた。 2 「六条院はうそふきなめ給ひて」(『小鏡』)。物語では八月十五日の夜、出家をした女三の宮が勤行をしているところに光源氏が訪れ、経文を口ずさんだ。 3 「入道の宮の御かたへおはしまして」(『小鏡』)。「光る君、御おとづれありし」(『龍野』)。 4 「月御覧するに」(『小鏡』)。 5 「御まへのせんさいに、(前裁)はなたれたるむしともの中に」(『小鏡』)。光源氏は女三の宮の庭を秋の風情に造りかえ、虫を放った。 6 「す、むしの花やかになきければ」(『小鏡』)。「鈴むしのなく音を聞て」(『龍野』)。「鈴虫」は『日本国語大辞典 第二版』では「松虫の古称」としながらも、語誌では「鳴き声によって区別することができる文献は近世に入るまで見当たらない。そのうえ、近世の文献においても両者は混同されており、一概にどちらとも決め難い」と解説している。鈴虫と松虫の鳴き声の違いが区別できる資料は少なく、謡曲「野々宮」では「松虫の音はりんりんとして」、謡曲「松虫」でも、「きりぎりすひぐわし蟋蟀茅蜩いろいろの色音の中に別わけてわが偲ぶ松虫の声りんりんとして夜の声」とあり、この当時の松虫の鳴き声は現代の鈴虫と同じである。『龍野』の著者(円尾祐利)が執筆した『東山殿花伝抄』(たつの市立龍野歴史文化資料館蔵)にも、「松虫トハ、リンリント間ノツ、ク故ニ、マツムシト名ツク」、「ス、ムシトハ、チンチンチロリト、ス、ノ如キナキ

ネアル故二名ツク」と記され、現代とは逆である。一方、江戸時代の国学者安藤為章あんどうのめあきろ（生没一六五九〜一七一六年）が晩年に著した随筆『年山紀聞』には、「色をもていはゞ、黒はまつ虫、あめいろなるはずゞむし」とあるが、同じ頃に刊行された『和漢三才図会』（二七二年自序）では松虫は「褐色」、鈴虫は「真黒」とされ現代と同じである。7「むかしといまの心をこめて、よみ給ひし歌を、名としたる巻にて候」（『龍野』）。女三の宮が出家した後も、光源氏は女三の宮に対する未練がある。8巻名歌。『小鏡』『龍野』同文。尼になった女三の宮への執着を詠んだ、光源氏の和歌。「草の宿り」は六条院、「鈴虫の声」は女三の宮の声になぞらえる。「ふり」に「古ふるり」と「鈴」の縁語の「振り」を掛ける。9「此かたは、草花斗、賞翫する也」（『龍野』）。秋の野辺を模した庭（注5参照）なので、草花を使うのであろう。10「上の山かや、葉遣ひ、てつま、大事」（『龍野』）。萱は屋根を葺くのに用いられるイネ科、カヤツリグサ科の総称で、主として薄などが用いられる。『いけばな総合大事典』によると、薄は、「夏から秋にかけて、活け花では欠かすことのできない、あしらいの花材である」とあり、「美しくなびく葉の姿がこのまれ」たとある。11「八月十五夜の月と見るべし」（『龍野』）。物語でも八月十五日（注1参照）が舞台となる。『龍野』の図では薄の葉を一か所、丸く巻いていて、この丸を満月に見立てたか。薄を巻いたまま保つのは難しいので、「上の山萱の葉使い、手妻てづま大事なり」としたか。12注1を参照。13注2を参照。14菊は旧暦九月九日の重陽の節句に用いられるが、ここでは中秋の名月になぞらえたか。15「白花」は白い花の総称。「白花」は18松風の巻の注17でも月にたとえた。16「鈴菜（苺）」（すずな）は蕪かぶの異名で、春の七草の一つ。この場面は秋だが、鈴虫の「鈴」との縁で用いたか。

（香ノ木麻由）

